

---

批評と紹介

---

ジャン・ナジャル著

## 『オスマン帝国末期における労働と権力』

——タバコ労働者・経営者・国家 1872-1912——』

伊 藤 匠 平

## 1. はじめに

本稿では、オスマン帝国末期のタバコ労働者間の日常的関係や労使関係、そして労働運動の性格などを明らかにしたジャン・ナジャル著『オスマン帝国末期における労働と権力』（以下、本書）の批評と紹介を行う。オスマン帝国末期の社会変容を外国資本の会社で働く労働者の視点から考察したドナルド・クァタルトの研究<sup>(1)</sup>以降、帝国末期に関する労働史研究は大きな転換を迎え、労働環境や労使関係を職場ごとに分析する研究が現れるようになった。近年の研究の特徴として、エスニシティ、ジェンダー、地縁的結合の観点から労働者間の関係に注目する点が挙げられる<sup>(2)</sup>。特に、文書史料を用いて帝国末期の各職場の労働者や争議を分析したカーディル・ユルドゥルムはジェンダー構造やエスニシティの役割、労働力構成の特徴を総体的に明らかにした。しかし、その一方で、彼は労働者間の日常関係が争議に及ぼす影響、そしてストライキ参加者がとった行動の目的や論理などを十分に分析していない<sup>(3)</sup>。

ジャン・ナジャルはオスマン帝国及びトルコ共和国初期の労働史を専門とし、第二次世界大戦期トルコの国営工場労働者や、帝国末期の港湾労働者に関する論文がある<sup>(4)</sup>。彼はニューヨーク州立大学ビンガムトン校で2010年にオスマン帝国のタバコ労働者に関する学位論文により博士号を取得した後、現在は助教としてコチ大学史学科に務めている。

本書において、著者は労使関係や国家と労働者の関係に加え、ジェンダー、エスニシティの視点からタバコ労働者同士の日常的な関係を考察の対象とし、これらの諸関係が労働運動に対して与える影響、また、争議時

の労働者による行動の目的などについて論じている。

## 2. 内容紹介

第1章では帝国の労働運動の中で特にタバコ産業の労働運動が組織的なものであり、経営者に対し大きな抵抗を示したことを述べた上で、従来の研究が、争議における労働者の行動の意味や、どのように労働者が経営者・政府と交渉を行ったのかという点を明らかにしていないと著者は指摘する。また、ジェンダー、エスニシティという観点から、職場内及び労働運動における労働者同士の関係に焦点を当てる必要性を提示すると同時に、ジェンダー関係に関して、労働運動における女性の主体性を強調する。

第2章「オスマン帝国のタバコ産業——事業家と労働者——」では、オスマン帝国におけるタバコ産業の進展と外国資本によって設立されたタバコ倉庫（タバコ葉の選別、保管、梱包を行う施設）、工場内の労働力構成に焦点が当てられる。世界各地でタバコの消費が拡大した19世紀において、バルカン及びアナトリア産のタバコ葉は欧米から高い評価を得て、帝国の重要な輸出品目となった。帝国のタバコ産業は国内外の実業家にとって重要な資本投入先となり、特に、マケドニア地方に拠点を置く外資系会社がサロニカやカヴァラ、イスケチェなどにタバコ倉庫を建設し、大きな雇用を生み出した。加工業に関しては、1870年代に国営のタバコ専売局が専売権を持っていたが、帝国の財政破綻後、専売権は独・奥の銀行とオスマン銀行によって設立されたタバコ専売社のものとなった。同社はタバコ葉輸出を除く帝国内のタバコの生産、流通を独占し、既存の工場が閉鎖される中、イスタンブールのジバリなどに工場を設立して生産を集約した。

タバコ産業の労働力構成に関して、著者は倉庫では季節労働者と地元労働者が業務に従事していて、前者には出稼ぎにきた休閑期のタバコ農家が多かった点を明らかにした。以上の点に加え、倉庫内の労働者構成として女性が多かったことに特徴があり、倉庫と同様にタバコ工場でも安価な労働力として女性と児童が相当数雇用されていた。また、倉庫と工場共に宗教・民族的に多様な出自を持つ労働者が働いており、ジバリ工場では外国人労働者もタバコの生産に携わっていた点が指摘された。

第3章「一生かけてタバコで働く——工場と倉庫内の生活——」では、労働者の職場環境や労働者間の関係が検討された。倉庫では、労働力の調

達において親方層が職の斡旋や紹介を行うことで、職場内での自治権や親方・子方関係が確立されていた。工場に関しては、倉庫の親方ほど強い権限を持たなかった一方で、工場の親方は地縁に基づき職の斡旋を行うことで、斡旋の見返りとして同郷人に礼金を強要していた。

親方の存在に加えて、倉庫内にはデンクチと呼ばれる熟練労働者と、その助手であるパスタルジュが存在し、前者はその技術によって賃金交渉権や仕事の歩調を裁量する権利が認められていた。また、女性労働者が多数を占めるサロニカやイスケチュと異なり、男女混成の労働力構成を持つカヴァラでは、ジェンダー階層構造が存在した。カヴァラでは、家父長的支配に基づき、女性がその夫や父の助手として従属し、パスタルジュ以上の地位に就けなかった。ジバリの工場でも、女性労働者を監督する業務に男性が就いていたようにジェンダー・ヒエラルキーが存在したが、その一方で、監督業には少なからず女性も就いていたように女性も一定の力を持っていた。

工場労働者の自治について、タバコ葉選別を行う熟練労働者は他の部門の労働者と比べて高賃金や自治を得ていたのに対し、裁刻や巻上部門の労働者は機械導入によって大きな影響を被った。例えば、19世紀末のジバリ工場では、機械導入によって裁刻・巻上部門の労働者は失業の危機に直面し、結果的に労働者の解雇や賃下げ、そして生産速度の上昇がもたらされた。しかし、機械導入は労働者の反発を引き起こし、争議の誘因となった。

第4章「行動中の“無知”——ハミト期における労働者の抗議——」では、アブデュルハミト2世による独裁下（ハミト期）のタバコ労働者の運動を対象に、労働者の行動だけでなくハミト政府が争議に対し、如何なる対応を行ったのかについても焦点が当てられる。20世紀初頭のバルカン地方では、タバコ葉輸出の不振による賃下げを背景に、カヴァラやイスケチュの倉庫労働者は争議を起こし、政府の介入を受けるほど大規模なものとなった。イスケチュにおける1904年の争議では要求の一部が受け入れられたものの、要求の対象から失業者が除外されたために、失業者は争議の続行を望んだが、成功しなかった。この背景に賃金喪失や失職を現職の労働者が恐れたのと同時に、当該地域でのギリシア系とブルガリア系住民間の宗派紛争が労働者の分断をもたらしたと著者は推測している。男性親方層が中心的役割を担った1905年のカヴァラの争議でも労働者間の分断が見られ、

季節労働者が排除されていた。以上の両争議では労働者による倉庫窓の破壊や示威行進が行われ、窓の破壊に関しては、「無知な」行動ではなく、意図的な行動であったと論じられ、窓の破壊を通してタバコ葉の加工を不可能にすることでスト破りを防止する行動だと指摘された。

ジバリでは1893年から1906年にかけて断続的に争議が発生したが、工場全体ではなく、裁刻や巻上部門のような部門限定の争議であり、この背景に機械導入が大きく関わった。20世紀初頭に工場での機械導入が進められると、機械導入を拒否して幾度かの争議が発生した。結局、機械導入を阻止できなかったが、経営側は労働者との妥協を迫られ、労働者の解雇を行わないことを労働者に確約した。政府が記した争議扇動者のリスト中には女性が含まれていた点から、女性もジバリ工場の争議で重要な役割を担っていた。

争議に対し政府は、必ずしも弾圧政策を以て対処したわけではなく、1900年代初頭の争議では、労働者に温情を示して譲歩したように労使紛争の調停を担った。この理由として、この時期における青年トルコ人運動の拡大による体制の動揺ゆえに、支持基盤としてのタバコ労働者に譲歩する必要があったからだと著者は主張した。

第5章「労働者万歳——1908年の革命的歓喜——」では、1908年の青年トルコ革命直後に発生したタバコ労働者の運動が対象とされた。革命直前の経済不況と政治的自由を背景にして、各地でストライキが多発する「ストの波」にタバコ労働者も加わり、8月に発生したジバリ工場の争議では、賃上げ要求だけでなく、労働者の厚生の実現が求められた。革命の中心となった統一と進歩協会（以下、統一派）の介入を受け、この争議が調停に至った後、ジバリの労働者は宗教・民族横断的な同職組織を結成したが、女性が組織の指導者層から除外されていた。

デンクチが中核となった9月のカヴァラにおける争議では、賃上げに加えて労働時間の短縮が要求された点、スト破りの防止策としてハミト期に用いた倉庫窓の破壊ではなく、ピケ張りを導入した点が特徴として挙げられる。また、争議での交渉を労働者の優位で進めるために、タバコ労働者は旧体制の官吏を排除しようとする統一派の地方支部に接近した。

サムスンでは専売社の労働者が争議を起こし、サムスン支部長が賃上げ要求に対して硬直的な態度を取ったために暴動へ発展した。暴動の鎮圧後、

労働者が支部長の邸宅を包囲し、専売社のタバコ密輸取締りに不満を持つ町の住民も包囲に参加した。興味深いことに、ここで、邸宅を包囲する人々を鎮圧するために派遣された軍は傍観を決め込み、間接的に労働者を支援した。この静観の背景に、タバコ農家出身の兵士たちが生活苦の農家に無利子の融資を行わない専売社に不満を持っていたことがあると著者は推測している。

労働運動の昂揚の結果、資本家や政府に加え、統一派の中枢は労働運動に対する弾圧措置の必要性を認識して、同年10月にストを制限するストライキ臨時法の制定に至り、タバコ労働者の運動も抑圧された。

第6章「歓喜の後に——新たな可能性と問題——」では、1909年から1911年までのタバコ労働者の労働運動が検討された。この時期にタバコ労働者たちは左派系の議員や組織との接触や、その支援を通じて、あるいは結社法に則り政府の認可を得ることで労働者組織の設立を行い、組織的な運動を可能とさせた。1911年にはタバコ産業で「ストの波」が生じ、同年ジバリ工場では、再設立された組合が各部門の女性・男性労働者を包括することで、1か月以上の長期的、組織的なストを行えた。しかしながら、ストの長期化でスト資金が尽き、経営側がストによる損失を他地域からの供給を通して抑えたことで争議は労働者の敗北に終わり、これ以降、ジバリの労働運動は委縮した。ジバリに続き生じたサロニカの専売社工場のストでは、要求の中で女性の声が反映されるほど、女性が重要な役割を担った一方で、同時期のカヴァラの争議は女性労働者の雇用拡大への反発を背景に行われ、男性労働者の利害を代弁する性格を持った。

バルカンでの争議は基本的に労働者側が勝利した。その背景として、タバコ市場の好調ゆえにストが利益損失をもたらすことを会社側が恐れた点が挙げられる。上記の争議の後、バルカン地方の労働者は宗教・民族横断的だけでなく、地域横断的な労働組合の連合を築くことに成功した。しかし、1912年のバルカンにおけるタバコ輸出の停滞は経営側にとって好機となり、賃金切り下げを始めとする労働者への統制を行った。また著者は、オスマン・ギリシア間の紛争、クレタ島問題に端を発するギリシアへのボイコットがタバコ労働者間の民族対立に大きな影響を及ぼした可能性を述べた上で、イスケチェでキリスト教徒に不満を持つムスリムが主体のタバコ労働者の組合が設立された事例を紹介している。

バルカン戦争後、労働運動の中心地であったバルカン地域の大半がオスマン領から失われたことでタバコ労働者の運動は委縮し、1913年のクーデタによって権力を掌握した統一派が反体制派に対して弾圧措置をとったことによって帝国における労働運動は冬の時代を迎えた。

結論では、バルカン戦争後にギリシア領となったマケドニア地域、トルコ共和国でのタバコ産業における労働運動の展開がオスマン帝国期の遺産として示された。戦後、両地域の労働運動は共にナショナリズムの動きに同調するような傾向が見られた一方で、1914年に発生したサロニカとカヴァラのタバコ倉庫での労働争議について、その要求内容の観点から、また争議でギリシア人とムスリムの親方層が指導的な役割を担ったことから、オスマン統治期における労働運動との連続性が指摘された。トルコではタバコ産業における労働運動がカヴァラやサロニカなどの地域からトルコに移住した労働者によって牽引されていた点が示された。以上の点を示した上で、帝国末期における宗教・民族横断的な性格を持つタバコ労働者の運動の意義や、その遺産の重要性を強調する形で締め括られている。

### 3. 本書に対する評価と疑問

本書の意義は、①オスマン語政府文書に加えて新聞、英米の外交報告、ルポルタージュ、写真、労働者の伝記などに基づき労働者の日常的関係や階層性を明らかにしたうえで、労働者間の関係が労働運動に与える影響について分析を行い、②争議に対するハミト体制の政策を当時の政治状況と関連させて体制基盤の確立という文脈で位置づけ、③争議における労働者の行動目的を検討した点である。

まず、①に関して、労働者を「統一された均質的集団と見なさない (pp. 9-10)」とする著者の問題意識が示すように、労働者間のジェンダー関係や宗派・民族的対立、親方の権力などに関する分析を通じて、労働者内の階層性や分断が与える労働運動への影響を本書で示したことは重要な成果といえる。近年の研究では、職場内の労使関係、労働者間の社会関係に焦点が当てられてきた一方で、労働者内部の日常関係と争議との関連性が十分に論じられていないことを踏まえると、労働者内の階層構造や分断が争議に与える影響に注目して労働者の複層性を示した本書は、労働（運動）史研究の進展に大きく寄与したと言えよう。次に、②に関して、ハミト体制



が争議や労働者に対し家父長的な温情措置を行っていた点が既に指摘されているものの、体制側が家父長的態度を示した理由は先行研究では十分に論じられていない<sup>⑤</sup>。従って、ハミト政府が体制打倒を目指す青年トルコ人運動に直面して体制の支持を確立する必要に迫られたことで労働者に宥和的な対応を行ったという著者の指摘は、ハミト期の労働政策に関する理解の深化に貢献したといえる。そして、③については、著者も述べるように、スト参加者がとった行動の背景や目的に目を向けなかった従来の研究状況（pp. 6-7）を考えると、労働者が当時の政治・社会状況に適応して、労使交渉で優位に立つために戦略的に行動していた側面を著者が示したことは、争議における労働者の自律性や行動論理の解明という点から見て、大きな意義を持つだろう。

最後に、細かい点であるが、評者の疑問点をいくつか提示したい。第一に、サムスンにおける1908年の争議中に生じた支部長宅の包囲に町の住民が参加した点についてである（pp. 124-128）。労働者の示威行進や邸宅包囲に乗じてアルメニア教会の焼き討ち未遂事件やアメリカ人商館への襲撃が発生した点が先行研究で示されているにも拘らず<sup>⑥</sup>、住民も参加した行動で矛先を向けた対象が、専売社だけでなく、教会や商館にも移った側面を著者が説明していないのは問題であろう。邸宅包囲における住民の心性も対象とする以上、労働者・住民が一体となったと著者が評価する行動での「逸脱者」についても、労働争議ではなく都市騒乱という観点から、その要因や背景を検討する必要があるだろう。

第二に、第6章で1911年の争議後、バルカン地方のタバコ労働者が地域横断的な組織や交流を築くことができた点を著者は示しているが、その背景を明示していない点は分析として不十分かと考える（pp. 157-158）。帝国末期の労働者が地域横断的組織、職業別組織を築くことができなかったという従来の研究での評価を踏まえれば、タバコ労働者の組織はかなり例外的なものであったと言える。従って、他の労働組合と比較してタバコ労働者の地域横断的結合を可能とさせた要因を、労働者の人的流動性などの観点から考察すべきであったと考える。

しかしながら、以上の疑問点は本書の意義を大きく損なうものではない。オスマン帝国における外国資本の流入による工業化と社会変容、そして労働運動の展開に関心を持つ者にとって、タバコ産業を事例とする本書は一

読に値する。

註

- (1) Donald Quataert, *Social Disintegration and Popular Resistance in the Ottoman Empire, 1881–1908* (New York: New York University Press, 1983).
- (2) 例えば、次のような研究が挙げられる。Peter Mentzel, “The ‘Ethnic Division of Labor’ on Ottoman Railroads: A Reevaluation,” *Turcica* 37 (2005), pp. 221–241; Gülhan Balsoy, “Gendering Ottoman Labor History: The Cibali Régie Factory in the Early Twentieth Century,” *International Review of Social History* 54-17 (2009), pp. 45–68; M. Erdem Kabadayı, “Working in a Fez Factory in Istanbul in the Late Nineteenth Century: Division of Labour and Networks of Migration Formed along Ethno-Religious Lines,” *International Review of Social History* 54-17 (2009), pp. 69–90.
- (3) Kadir Yıldırım, *Osmanlı’da İşçiler (1870–1922)* (İstanbul: İletişim, 2013).
- (4) Can Nacar, “‘Our Lives Were Not as Valuable as an Animal’: Workers in State-Run Industries in WorldWar-II Turkey,” *International Review of Social History* 54-17 (2009), pp. 143–166; “Labor Activism and the State in the Ottoman Tobacco Industry,” *International Journal of Middle East Studies* 46-3 (2014), pp. 533–551; “İstanbul Gurbetinde Çalışmak ve Yaşamak,” in *Tanzimat’tan Günümüze Türkiye İşçi Sınıfı Tarihi, 1839–2014*, ed. Y. Doğan Çetinkaya and Mehmet Ö. Alkan (İstanbul: Tarih Vakfı Yurt Yayınları, 2015), pp. 120–131.
- (5) Yıldırım, *Osmanlı’da İşçiler*, pp. 228–229.
- (6) Yıldırım, *Osmanlı’da İşçiler*, pp. 236–237.

Can Nacar, *Labor and Power in the Late Ottoman Empire: Tobacco Workers, Managers, and the State, 1872–1912*, London: Palgrave Macmillan, 2019, 202pp.

(東京大学大学院総合文化研究科修士課程)